

収穫が終わると、園地へ足を運ぶ機会が減るかと思いますが、ブドウにとっては来年に向けて養分を蓄えるための重要な時期になります。次年度以降も安定的な生産を行うために、収穫後の管理を徹底しましょう。

### ●新梢管理

#### ○遅伸び防止

収穫後も副梢が伸長を続ける場合があります。そのまま放置すると貯蔵養分の蓄積や、枝の登熟の妨げとなり、冬季の枝の枯れこみ、翌春の発芽バラつき等の原因となります。収穫後も副梢の摘心を行いましょう。

肥料が遅くまで効いている場合や、樹勢が強くなっている場合も遅伸びを助長します。枝が遅伸びしている場合は、本年度の施肥量や有核栽培は新梢の伸び具合、無核栽培は副梢の摘心時期・回数を振り返って、次年度の肥培管理に活かしましょう。

#### ○早期落葉防止

ブドウの葉は、気温が低下する 11 月頃から徐々に落葉します。収穫後から落葉までの期間は、光合成により貯蔵養分を蓄え、枝の登熟が進む重要な時期となります。そのため、早期落葉させずに正常な葉を維持する必要があります。

早期落葉は、収穫後の防除不足、新梢や副梢の管理不足による棚面の混み合い、土壌の過乾燥が要因となりますので、収穫後の防除、不要な徒長枝の除去、副梢の摘心、こまめなかん水を行いましょう。

#### ○かん水

収穫後は発生した秋根が伸長し養水分の吸収が盛んになります。そのため、収穫後にも十分な水が必要です。近年の秋季の降水量は減少傾向にあり（ベジフル SAGA 本号\*ページ）、秋季の水不足によって、発芽や開花の不揃い、花穂の充実不足といった問題が発生しています。

降雨に頼るのではなく、収穫後もかん水を行うことが次年度以降の安定生産につながります。秋季も積極的にかん水を行ってください。

## ●土づくりと施肥

### ○土壌診断

園地の土壌の状態を把握するために、2～3年に1度は土壌診断を行いましょう。施肥前に行い、診断結果やその年の栽培状況に応じて、肥料や土壌改良材の量を調節します。

### ○施肥

10月中旬～11月上旬は、基肥の施用時期となります。窒素成分で10a当たり4kg（1.5t/10a目標）を基準とし、本年産の生産量等に応じて増減させ施用してください。樹勢が極端に強い場合は無施用とし、開花直後の夏肥と収穫後の礼肥で調整します。肥料の分解、吸収を促進するために、地温が高い時期にかん水と合わせて実施してください。

### ○土づくり

SSやモアなどの機械で何度も園内を走行するため、土壌が固くなっている園地が多くみられます。土壌が硬いと新根の伸長が抑制され、細根の発生が少なくなるため、根による養分吸収がうまくできていない可能性があります。そのため、有機物の施用と併せて、深耕やグロースガンを利用し、土壌の物理性を改善しましょう。

### ○病虫害防除

◇トラカミキリ：モスピラン果粒水和剤 2000倍

（山間部や多発園）：トラサイドA乳剤 200倍 加用プラテン 80 800倍

※使用する薬剤は地区によって異なる場合がありますので、詳しくは最寄りのJAや農業振興センターへご相談ください。また、散布前に登録内容や注意事項をご確認ください。